

○男懷恩。

これ公主と覓覓との間に生れたるものにして、此の人に就ては余は何等の知る所なし、陸氏の言ふ所によれば、黄本驥は此れを以て彼の僕固懷恩に非るなきやを疑ひしと雖、其の然らざるは、懷恩傳を見る迄もなく、僕固或は僕骨の名が既に此れを證して餘りあり。

○田移物或。

物或の二字は余の解し能はざる所なり、或は「勿惑」の如き意なりや、學者の教を待たんとす。

○風急 門。

急字の下一字を缺くこと明らかなり。

以上此の墓誌について、重に歴史の上より見たる余輩の管見を施せり、此の以外の文字の解釋の如きに至りては茲に目的とする所に非れば、只だ訓點を加ふるに止めたり。

思ふに當時北方民族に關する史料は極めて鮮少なれば、史の記する所以外、傳へて今日に存するものは、隻句も亦た輕んず可らず、況んや此の一文、能く玄宗の對突厥政策の實を語り、其の他にも種々史の缺漏を補ひて、興味